

講演が行われた。第二日目、三日目は、実行委員会によって作成されたテキスト(IM, EM), 問

題集等にもとづいて「演習」が行われ、3日間の研究集会を終了した。

昭和53年度全国図書館大会に参加して

今年度は、10月12日(木)から14日(土)まで氷雨の降る青森市で、約1,300名参加のもとに開催された。

第1日目は開会宣言につづき、主催者として森戸辰男大会名誉会長より「国会に衆参両院250余人による図書議員連盟が設立されたり、国土庁が出した『第3次全国総合開発計画』の中にも図書館関係の政策が折り込まれており、我が国の図書館は今大きな転換期に差しかかっている。」との挨拶があり、浜田敏郎理事長は「国際経済の押し寄せる波にもかかわらず、今や世界的に生涯教育がさけられてきている。ここ東北でも文庫運動等の図書館活動が活発に行われている。また国家規模の図書館計画も企画され、いまや図書館問題も新しい組織と構築を点検し、実施されるべき時にいたっている。多くの利用者に新しい情報を適確に、かつ迅速に提供し得るようにするためには、地域や館種を越えた図書館ネットワークが必要である。それによって知的情報源の確立もできるのではないか。」と基調報告された。

記念講演は作家倉光俊夫氏が、「津軽に魅かれて」と題して東北地方の風土・人情・言葉について話をされた。

第2日目は「未来の知的情報をどうするか—21世紀に向っての図書館—」のテーマの分科会に出席した。大学図書館、専門図書館の人々を中心に350名以上の参加者で、会場を変更したほどの盛

況であった。田辺広氏外6名によるシンポジウム形式で討論が進められたが、図書館の未来像は、「エレクトロニック・ライブラリー」であり、「ポータブル・ライブラリー」であろう。文明が日一日急速に進歩するなかで図書館業務は、ますます機械化してゆくであろうが、導入にあたっては、組織をこえて、横のつながりを容易にし、「オンライン化することが大切である」という点に話は集中した。ますます増える二次情報の選別については図書館員の配慮が重要であり、利用者教育の必要性も強調された。図書館資源を拡充し、利用者がいつでも、どこでも、誰でも容易に資料を得られるようにし、活発に利用される理想の図書館にするためには、利用者と提供者、両者の協力と調和が大切で、その実現方法が図書館界の今後の大きな課題である。

最終日、閉会式は各分科会の報告が行われたが、公共図書館・地域図書館の活発な発言が内容とともに充実しており、また「障害者への図書館サービス部会」では、弱視者・視覚障害者へのサービスが大きくとりあげられていて報告者の熱意ある発言も印象に残るものがあった。

そして最後に聴いた郷土芸能高橋竹山師の津軽三味線のさえた音色とともに図書館大会は感銘深い三日間であった。

(法学部図書室 旭照子, 前田和子)

附属図書館商議会商議員名簿 (昭和53.11.1 現在)

議長	附属図書館長	林 良平	商議員	工学部長	西原 宏
商議員	文学部長	西田 龍雄	"	農学部長	坂本 慶一
"	教育学部長	蜂屋 慶	"	教養部長	上田 正昭
"	法学部長	片岡 昇	"	原子エネルギー研究所長	鈎 三郎
"	経済学部長	平井 俊彦	"	木材研究所長	樋口 隆昌
"	理学部長	林 忠四郎	"	経済研究所長	行沢 健三
"	医学部長	菅原 努	"	教授(文学部)	清水 純一
"	薬学部長	中垣 正幸	"	" (教育学部)	渡辺 洋二